



第27号  
2023年9月



◇新潟まち遺産の会会報 第27号  
2023年9月25日発行  
◇新潟まち遺産の会 (代表 大倉 宏)  
〒950-0131  
新潟市江南区袋津3丁目1-48  
E-mail: chanoma@machi-isan.sakura.ne.jp  
TEL 025-384-0444 / FAX 025-384-0844  
ブログ: machi-isan.blog.jp

## 佐渡で町並みネットワーク大会

5月27日・28日に新潟県町並みネットワーク  
小木大会と新潟県美しいまちなみフォーラムが  
開催されました。大倉宏が当会を代表して参加、  
フォーラムには当会の松井大輔がコーディネー  
ターをして参加しました。二人の報告です。

### ◎新潟県町並みネットワーク

5月27日は宿根木を歩きました。修景や公開、  
活用が着実に進行していて、歴史的空間を守りな  
がら訪問者にも開かれたいい町になってきたこと  
を実感しました。

28日は雨になりましたが、小木の町を歩きま  
した。城山に隔てられた内の間（今は漁港）と外  
の間（今は佐渡汽船など大型船が発着）という二  
つの湊でできた町であること、風による船の被害  
や、地震による隆起で湊が遠くなり、再編された  
こと、明治の大火後の町並みが今も残ること、湾  
曲する街路に沿った面白い町屋の作りや、新潟と  
同じ高窓付き雨戸や、ショーウィンドウのある特  
徴的なファサードなど、重伝建になり修景が進め  
ば、魅力的な町になると思えました。

新発田、新潟、上越の団体でネットワーク総会  
を行ったあとは、県主催の「美しいまちなみフォー  
ラム」がありました。福川裕一さんの基調講演  
は、「歴史的まちなみ」を形成してきた人間の感情  
（快適な居心地）から生まれた空間のよさは、  
むしろ21世紀の建築のあり方だという前置きの  
あと、都市デザインの観点を中心に、歴史的な町  
の魅力を構成しているシステムをオーセンシ  
ティ（真正性）とともに継承していくことが、新  
しい持続可能なまちづくりにつながっていくとい

う内容でした。

シンポジウムでは重伝建が3地区ある高岡の筏  
井晴夫さん、小木の岡崎拓夫さん、宿根木の柴田  
博文さんが発表されました。

高岡で筏井さんが案内人をつとめる〈山町  
ヴァレー〉という蔵造りの建物では若い人たちが  
借りて店を出しているが、一般店舗というより  
は、専門的な店舗で不特定多数をターゲッ  
トにした店ではないところが続くようだという  
お話や、3つの重伝建地区は考え方の違いが  
あり、交流が少ない現状になっているという  
報告が印象に残りました。小木と宿根木の関  
係を考えると、「それぞれの考えがあってよ  
い」とも受けとめられますねと、司会の松井大  
輔（当会世話人）が適切にまとめていました。

柴田さんからは、保存に関わる世代の「中抜け」  
の状況が語られました。宿根木では今は60台か  
ら70台が中心となって歴史まちづくりに取り組  
み、町おこし協力隊は30台前後の人たちで、中  
間世代の関心がいま一つなのが現状とのことで、



小木の5階建ての旅館

それは小木でも同じとのこと。

小木は新潟大学の調査研究が「重伝建」への動きの発端となったとパネリストの岡崎さんが語られ、住民の意向調査でも70パーセント以上の賛成・協力が得られ来年度の認証を目指しています。

船の待ち時間に両津（湊と夷）の町も歩きました。町屋だったと思われる家が前面に短い塀と、わずかな前庭を作り「一戸建て」住宅風に作り直した家なども散見され、コンクリート建築など、まったく異質な建物が町並みに破調を作り出しているよく見る光景があまりないのも特徴だと思いました。

佐渡は世界遺産登録を目指しています、玄関口である両津でもっと歴史まちづくりの観点での取り組みがなされるとよいと思いました。（大倉）

### ◎新潟県美しいまちなみフォーラム

今年の「にいがた美しいまちなみフォーラム」は、現在、国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）の選定に向けた準備を進めている佐渡南部の港町・小木が舞台でした。陸繋砂洲の上に形成された市街地には多くの町屋が残り、古くは金銀の積み出し港として栄えた港町の風景を今に伝えています。

2007年の新潟大学による町並み調査を契機に町並み保全の取り組みが始まり、住民と行政が協力しながら、少しずつ町並みに関わる関係者の輪を広げて、いよいよ重伝建という段階まで歩を進めました。着実に進む町並み保全の活動に尊敬の念を抱けばかりです。

さて、今回のフォーラムでは「歴史・文化を受け継ぎ、新たな価値を創出する地域づくり」をテーマにパネルディスカッションを開きました。これまでの小木における取り組みを総括しつつ、未来の町並みづくりに向けて、宿根木と山町筋（高岡）という重伝建の先輩の話題から展望を見出すという内容です。

組織の法人化やビジネス展開など両地区における新しい挑戦と、次世代（特に子どもたちの世代）への継承という課題が共有されたように思います。これらの経験を踏まえて、姿を変えていく小木の町並みにまた期待をしたいと思います。（松井）

## 重要文化財・萬代橋と水辺空間 ——高層建築から景観を守るために

新潟市は、信濃川河岸付近に高層建築の建設が進んだ事態を受けて、2007年の「景観計画」策定に合わせ関屋分水から下流の岸から100メートルの範囲に、50メートルの高さ制限を設けました。

背景には、2005年当会を含む新潟市の5つの市民団体と新潟市が共同で開催した「萬代橋景観フォーラム」開催など、市民の水辺景観への関心の高まりがありました。

2022年から23年にかけて新潟市景観審議会はこの特別区域の景観形成基準の一部修整を求める新潟市の提案を審議し、パブリックコメントも経て、提案をこの9月に了承しました。

この修整により、萬代橋周辺の建築物は高さ100メートルの高層建築が、周辺にオープンスペースを設ける等の条件を満たせば建設可能となります。

「萬代橋景観フォーラム」のメンバーでもあった当会は、この「制限緩和」により萬代橋近傍にタワーマンションが建設され、萬代橋と釣り合わない景観が誕生することを危惧し、2022年3月19日、4月29日、8月19日、9月17日、12月26日の5回、リモートによるセミナー「萬代橋の景観を考える」を開催しました。また本年6月24日には総会開催に合わせ「萬代橋の景観を考える7」をみなとびあセミナー室にて対面で開催しました。

これらのセミナーを通じて萬代橋の価値や水辺空間の魅力を学ぶとともに、タワーマンションの増殖とともに出現した公開空地が「殺伐とした空間」となってしまった問題と、それを克服する手法としての「まちなみ型まちづくり」の考えを福川裕一氏（千葉大名誉教授・全国町並み保存連盟理事長）より学びました。積み重ねたこれらの学びを生かすため、今後もセミナーを続け、年度内に市民の立場からの「萬代橋周辺景観ガイドライン（仮称）」をとりまとめ、新潟市に提案したい考えです。

次回のセミナーは景観と色彩をテーマに10月21日（土）に開催の予定です。（大倉）

# 奥能登地震から4ヶ月

## ——被災地からの報告——

この5月5日、能登半島最先端の珠洲市沖を震源に発生した奥能登地震。今から16年前の2007年3月の能登半島地震と比較して被災エリア・規模こそ1/3程度（応急危険度判定対象家屋数から算出）の局地地震であったものの、この4カ月のうちに見えてきた新たな課題は何か？

高齢化、空き家率ともに高い同地での、近未来ニッポンの将来を縮図的に暗示するような事象を含めて、被災地支援に通う当会世話人長谷川順一からの現地報告です。

### ◇脆弱化する地方のまちの被災

奥能登地震は、2021年4月以来有感地震500回を数える群発地震2年目にして起こった震度6強の最大余震です。震災直後から行われた被災家屋調査相談の中では、2022年6月の震度6弱の最大余震後、土蔵と主屋の土壁など傷んだ部分を数百万円かけて直し終えた矢先であったという住民さんもある一方で、修繕の手の及ばない家屋の中には、以前より傾きが増したという相談もありました。

多くの方々が「また次に揺すられたら……」という不安を口にされている状況に、安全に修復補強して住み慣れた我が家に帰る手立てがより強く求められていることを強く実感します。

全国で空き家が社会問題となって久しい中、能登半島の先端部に位置する珠洲市は、まさにその社会問題でも先端を行くまち。長年その地に暮らしてきた高齢者も多い一方で、不在地主なども多く、空き家数は市中の家屋の1/3を占めている状況です。

そこへ来て今回の一連の地震で、被害が大きいというだけで建物を建て替えたり、復興公営住宅に入居するように誘導すれば、被災者自身の身体的・精神的負担も増えるばかりか、地域の繋がりがさえ崩壊してしまう懸念もあります。

### ◇コミュニティの弱体化を防げるか

これまでの生活環境を維持しつつ、長く住んできた建物の安全策を講じて住み続けるための支援は必要です。しかし現実には小さな自治体ではマンパワーも限られ、金沢からクルマで3時間と

いう地理的不利もあって、支援の手は社会福祉的にも建築職人専門家的にも限られ、復旧復興の進捗に目が離すことが出来ません。

一方被災者生活支援の公的制度も多くは被災者からの申請が前提です。その申請も、何らかのサポートがなければ、高齢者、なかでも在宅での要介護者など、リフォーム修復はおろか支援金受け取りもままならず、放置すれば壊れたままの家でひっそりと生活継続という事態も想定されます。

まさにこのままでは地震がコミュニティの弱体化を加速させ、震災後の生活再建の障壁が、さらなるコミュニティ健全運営に障害を招くという、脆弱化スパイラルが懸念されます。東日本大震災以後復活した公費による建物解体も適用され、被災した町並み解体にも拍車がかかる様相も懸念されるようです。

### ◇歴史ある建物も危機に

地方中核都市から遠く離れた地理的条件の不利もあって、歴史ある建物が創建当時のまま数多く残されている皮肉。更新されぬまま地震で傷ついた歴史的建造物の全てを残すことは不可能であっても、選択的に生かして良き活用事例とできればと思います。住み慣れた暮らしを維持しながら、安全に建物を修復再生していく取り組みは、地域再生の選択肢として、職人不足をも乗り越えて逆境の中でこそ模範的になされるべきと、現在も手弁当に近い中で取り組んでいる最中にあります。

なお支援の継続のために、皆様からの善意のご寄付を募っておりますので、よろしくご協力をいただきますようお願い申し上げます。

【振込先：第四北越銀行 新潟駅南支店

店番号301（普通）847339

たても修復支援ネットワーク代表長谷川順一】



解体か再生かに揺れる建物

## 世話人からの報告

当会の世話人から、市内各地の最近の動きを報告してもらいました。

### ◎市山七十郎さん重要無形文化財保持者に

新潟市古町に拠点を置く市山流は、振付師の市山七十郎（いちやま なそろう）が18世紀半ばに興した流派とされます。幕末頃に3代目が新潟を訪れ、後に4代目となる市山七十世に舞踊の指南を行い、以後新潟を拠点に継承されてきたと伝わります。

2003（平成15）年には新潟市の無形文化財に指定されるなど、新潟を代表する伝統文化の一つです。

今年7月、『日本舞踊』が新たに重要無形文化財に指定され、計56人の日本舞踊保存会会員が重要無形文化財保持者として追加認定されました。市山流の当代家元・7代目市山七十郎さんもその内の一人として認定されました。近年、若手の古町芸妓からも市山流の名取が誕生しており、今後の市山流と古町芸妓の益々の盛り上がりが期待されます。（久保）

### ◎古町花街における景観保全の動き

近年、古町花街で景観や文化財の保全活動が活発化しています。直近では、今年7月に東新道沿いの『瓢亭（旧花岡家住宅）』が登録有形文化財になりました。当会でも2016年頃から地元市民団体と協力し、保存活用に向けて公開イベントを行ってきた思い入れのある建物です。2020年に鰻料理店・瓢亭が購入し、現在も文化財的価値を尊重しながら活用しています。

文化財登録を目指す動きは他にもあり、古町花街での文化財保全の機運はこれまでになく高まっています。さらに古町花街の中核部において、花街の風情が感じられる景観形成を目指し、景観計画の特別区域指定に向けた動きも新潟市と地元市民団体により進められています。こうした景観や文化財の保全活動の盛り上がりと並行して、地域を火災等から守るべく自主防災組織も近年新設され、火災予防・啓発の取り組みも広がりつつあります。今後の古町花街の歴史的景観や文化を活かしたまちづくりの進展にご注目下さい。（久保）

### ◎袋津のまちづくりの今

新潟市江南区旧亀田町の中に500年以上も昔から人の営みがある地域「袋津」。

亀田第一砂丘の上にあるこのまちは、地形なりに道ができ、細い路地が入り組む迷路のまちとして近年知られるようになりました。

歴史があり、また戦前戦後に機業で隆盛を極めたこの地には、土蔵や蔵をはじめ歴史を感じる建物が沢山残り、道の魅力と相重なり魅力的な景観が今も息づいています。

そんな景観が良い形で継承できるよう、今から15年程前から、マップを作りまち歩きを行い、価値魅力を多くの人に知ってもらう活動を行っています。近年は地元の子供達に価値魅力を伝えることも重要と感じ、小中学校の総合学習で知ってもらう活動もしています。

少しずつですが、地元民にも地域外の人にも「迷路のまち袋津」の魅力が浸透してきたように思います。あとは建物や景観が実際に保存継承していくことを進めていくことが、これからの課題となっています。（伊藤）

### ◎本町遊郭跡の建物が取り壊しに

新潟市中央区本町14番町にはかつて新潟遊郭がありました。その名残をとどめる建造物が20年前にはまだかなり残っていましたが、多くが取り壊されました。隣接するコンビニエンスストアの駐車場拡張のため、今年になり新たに2棟の歴史を刻んだ建物が姿を消しました。工事の始まる前に見学会が行われました。細長い敷地の上下階に小座敷が多く作られた間取りで、1棟は旅館として営業していた時代がありました。（大倉）

### 全国町並みゼミ新潟市大会報告書が完成

2022年6月全国町並みゼミ新潟市大会を開催したことは、昨年度の活動報告でもすでにお知らせしたとおりです。大会後には報告書を作成し、その完成を機に3月4日、実行委員会の振り返りの会を、砂丘館で行いました。

報告書は下記の全国町並みゼミ新潟市大会のHPからダウンロード可能です。（千早）

[https://machi-isan.sakura.ne.jp/machinami\\_niigata/](https://machi-isan.sakura.ne.jp/machinami_niigata/)